

まじわり 144 号

2014 年 2 月 23 日 発行

【巻頭言】『初めに言があった』

司 祭 バルナバ 菅原 裕 治

初めに言があった

ヨハネ福音書は、「初めに言があった」という文言で始まります。この部分を読むと、ほとんどの人が、創世記の冒頭を思い起こすと思います。事実、著者はそのことを前提に書いていると思います。そして、福音書の著者は、ここにある「言」を、神様の言葉や知恵と同時に、イエス様そのものと考えています。それは、ヨハネ福音書が示すイエス様が、この世界の最初から存在していた方だからです。ただし、そのことがそのことが明らかになったのは、イエス様が誕生してからです。つまり、イエス様の誕生の出来事とは、この世界・歴史の中にイエス様が生まれたとこと同時に、イエス様がこの世界の最初から、時間を超えて存在していたことが分かったということに他ならないのです。この意味でヨハネ福音書は、時空を超えて、クリスマスの物語を語っていると言えます。

イエス様が時間を超えて最初から存在していることを知ると、世界に対する見方が変わります。そのことをヨハネ福音書は様々な表現します。その一つが、「言の内に命があった」という表現です。命はイエス様が誕生する以前から大切なものです。そしてそれぞれの生き物の中に命があります。特に人間はその自分の命を守り、あるいは豊かにしようと努めます。しかし、本当の命とは、人間が追い求め、守ろうとする何かにあるのではなく、言であるイエス様の中にあるのだとヨハネ福音書は語ります。だからこそ、自分の命を追い求める必要はない。そのために争いあうことも、悩むことも、悲しむこともないのです。何故ならば、イエス様の中に本当の命があるからです。

次は、「命は人間を照らす光であった」という表現です。それは、イエス様の中にある命は、人間の目標や願望ではなく、私たち人間を照らす光であるということです。天地創造が光の創造から始まるように、人間は、物理的にも精神的にも暗闇を恐れ、光を求めます。そして自ら光を生み出し、いつわりの何かを光と錯覚する場合があります。しかし、イエス様こそが光である。神はそうように最初から天地を創造されていた。そのことを知った時、私たちはどんなことがあって暗闇にはいないのです。光の中にいて、何も恐れる必要はないです。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」からです。

そして次に、「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」という事実が、私たち人間に臨みます。その言であり命であり光であるイエス様を受け入れた人々に、神の子としての資格が与えられるのです。それは神の契約の民という枠組みが新しくなったというだけではありません。様々な時代の様々な文化によって作り上げられ、人間的つながりという意味での「絆」、人間の様々な主張・考えという

意味での「欲」、社会の常識や考え、あるいは学問という意味での「知」それらを超えて、イエス様を知った人は、神によって新しく生まれたものとなると断言しているのです。文字通り、イエス様の誕生によりすべてが今新しくなった。それゆえ、今、イエス様を信じた人は、その瞬間、すでに新しい世界に生きている存在となる、ヨハネ福音書は、最初からそのように断言しているのです。言葉を変えれば、ヨハネ福音書にとってのクリスマスの意味とは、イエス様の誕生を救い主の誕生であると知った人が、瞬時に新しい世界に入ったことを意味しているのです。

さて、このようにイエス様の誕生をとらえるヨハネ福音書の信仰は、非常に排他的な信仰に捉えられるかもしれません。あるいは、一種の思考停止のような信仰と受け止められてしまうかもしれません。あるいは、歴史を無視した信仰のようにも思えます。しかし、それらは、ヨハネ福音書の示す信仰の本質ではありません。

今日と同様に、イエス様の時代も、そしてヨハネ福音書が書かれた時代も、今、何が正義で何が悪であるか、あるいは、今、何が社会で問題であるか、どのようにそれを解決するか、そして自分たちはどのような歴史を歩んできたかを知ることが大切なこと事柄でした。しかし、それらの善悪の判断も、社会の仕組みも、歴史を書き記すことも、そもそも人間が作り上げたものであり、時代や文化によって異なります。そしてそうであるがゆえに、そこに人間の進歩があるとも言えるのですが、それらが根拠となって、争いや、憎しみ合うこと、奪い合うことが絶えないのです。

ヨハネ福音書は、全ての最初からイエス様が言として存在したことを告げます。そしてそのイエス様を信じた人は、その瞬間神の子として資格を受けた、救いに入ったと告げます。どこのだれで、どういう人で、何をしてきたか、何を考えているか、それらをすべて超越して、神の子としての資格を受けるのです。それは、時間と空間を超越しているからこそ真理なのです。そしてだからこそ、その信仰に入った人は、何があっても安心なのです。そして神の子とされた、神に守られた存在として、現実の世界で今ある与えられた命を生きることができるのです。そのことをこれからも私たちの希望として歩んでいきたいと思います。